



8月23日／夏休みさんまクラブの参加者たち(さんまハウス入口にて)

さんま

時間 空間 仲間

題字：川上早苗

NPOさんまクラブ

ニュースレター

第5号

編集：大川大地

発行責任：谷村徳幸



「さんまハウス」で事業を開始しました！ 大川大地（事務局長）

日中の暑さもだんだんとしのぎやすくなり、朝夕は少し肌寒くなってきました。いつもNPOさんまクラブへのご支援とご協力をありがとうございます。季節の変わり目です。風邪などお召しになりませぬよう、お気をつけください。

さて、今回のニュースレターでは、巻頭言に代え、皆様に「さんまハウス」の取得と事業開始を感謝をもってご報告させていただきます。

これまで私どもさんまクラブは、「三間（＝時間・空間・仲間）の創造」と言いつつも自前の「空間」を所有できる力がなく、水口教会会堂をお借りし事務所兼活動拠点として活動してまいりました。兼ねてより自前の活動拠点の取得を夢見てまいりましたが、この度、教会から歩いて約10分、水口城南駅近くに3階建ての中古家屋を取得するに至りました。「中古家屋」では何とも味気ないので、私たちは新しい活動拠点を「さんまハウス」と名づけました（「さんま御殿」の方がいいのでは・・・って声も）。

不動産屋と契約をしてから半年近く経ってしまいましたが、6月末に銀行より事業融資を受けて購入、1ヶ月近い準備期間を経て、7月末より「さんまハウス」での事業を開始いたしました。リフォーム工事もおおよそ全て完了いたしました。

2500万円以上の“借金”を15年返済と、私どもにとっては身の丈に合わないとても大きい買い物です。“借金”を返し終わる頃にはスタッフ全員40過ぎのおっさんになっています。不安がない、と言ったら正直ウソになります。でも皆様の後押しとご支援によって決断をいたしました。平日に行っている児童クラブ事業「放課後さんまクラブ」の利用者も開始当初よりも増加してきており、さんまクラブの活動が水口で必要とされていることを実感し、「さんまハウス」でのさらなる事業拡大を目指したいと思えます。臨時総会で長期借入れが承認されたのも会員の皆様の期待の表れと受け止め、新しく取得した拠点「さんまハウス」を中心に、これからも子どもたちの居場所の創造、またインクルージョン（内包的）社会の実現に向け、活動を続けてまいります。これからも皆様のお支援が必要です。改めて引き続きのご支援を賜りますよう、お願いいたします。

さんまハウスはこんな「居場所」



1階は勉強部屋、ゲーム部屋です。



庭に砂場ができました！
子ども達も大喜びです！



3階は工作室。



2階は音楽室。
キーボードや電子ドラムがあるよ。



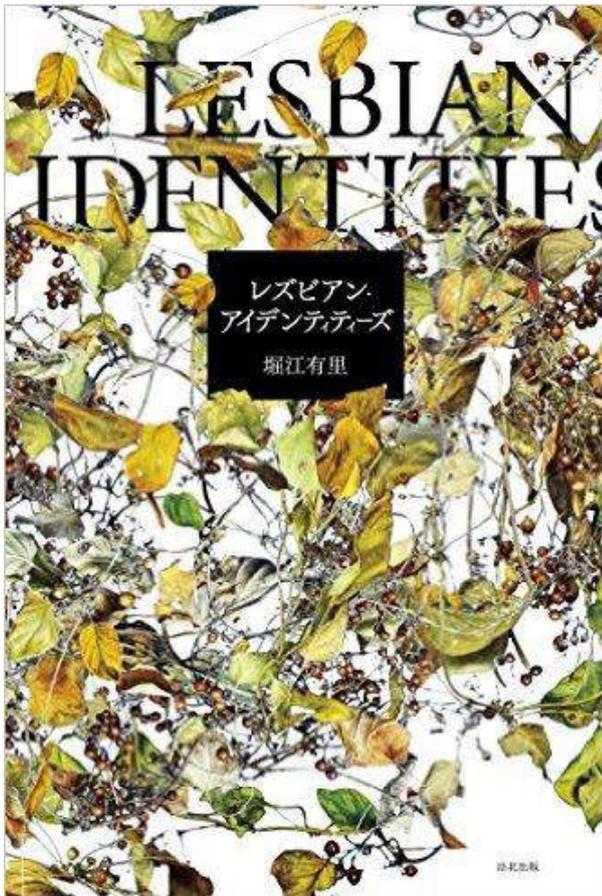
2階には念願の自前の事務所も！
整理整頓をしっかりね、事務局長！

さんまハウス取得募金へのご協力のお願い

新しい拠点「さんまハウス」を子ども達が安心して楽しく過ごせる居場所にするために、リフォーム工事、子どもの教材を中心とした備品購入を進めています。この7月に、日本基督教団の全国にある1700近い教会の中から600ほどの教会をピックアップさせて頂き、『さんまハウス』取得募金のお願いを送付しましたが反応が芳しくありません。会員のみなさまにも同じものを送らせて頂きます。

趣旨をご理解頂き、会費の納入と合わせてご協力よろしくお願ひいたします。

さんまの本棚 ～こんな本、読んでみました～



当法人の理事を務めて下さっている堀江有里さん（以下、敬称略）の新著『レズビアン・アイデンティティーズ』が刊行された。前著『「レズビアン」という生き方 ―キリスト教の異性愛主義を問う』（新教出版社、2006年）から9年ぶりの新著である。

「あとがき」によると「この本は、わたしが研究の世界に足を踏み入れて十五年近くのあいだに書き散らかしてきたものの一部を、大幅に書きなおしたうえでまとめたものである」（360頁）とのこと。おそらく既に学術誌等に発表された論文等が土台となっているのだろう。その分、前著よりも、ややムズカシイ言葉や概念が出てくるなあ、との印象を持ちつつ本書と格闘したが（だが、概念や用語の説明、参考文献の指示などは註で非常に丁寧になされている）、前著から堀江の姿勢は一貫しているように思われる。それは、本書の帯にも大きな字で書かれているが、「生きがたさへの怒り」と『「当たり前」は当たり前ではない』という二言に集約できる。

本書の目的を堀江は次のように記している。

「同性愛／異性愛、女性／男性という二項対立は、社会的に構

『レズビアン・アイデンティティーズ』

堀江有里著、洛北出版、2015年

築されたフィクションであることは、もはや現在のわたしたちには周知の事実である、しかし、そのフィクションは、フィクションであることを暴露されつつけても、なおも、さまざまな場面で補強され、再生産され、この社会のなかで、異性愛主義、男性中心主義という強固な規範として作用し続けている現実がある。であれば、その網の目をつぶさに読み解くことによって、それらの社会規範もつ、ほころびや裂け目をあきらかにしていきたいのだ。／ひとまずは「レズビアン」に注目し、こだわりつつけるのは、異性愛主義、男性中心主義という規範を同時に問題化し、考えていくためである。そこにしつこく留まることによって、〈レズビアン・アイデンティティ〉を、さらには〈レズビアン・アイデンティティーズ〉の可能性を、模索することにしたい」（45頁）

本書で堀江は、日本語で「自己同一性」と翻訳される「アイデンティティ」なるものを、自己と他者との「相互作用によってかたちづくられていく、流動的なプロセス」（118頁）として理解し、「アイデンティティ」の虚構を暴きつつも、「複数のアイデンティティがぶつかりあい、化学反応を起こしていく。…その可能性に賭け」（344頁）るために、あえて「レズビアン」という「名づけ」を引き受け、「そこにしつこく留まる」ことで、「当たり前」のフィクションを押し付けようとするこの社会の「生きがたさ」を暴露する、という戦略をとる。

アイデンティティ・ポリティクス、解放運動の歴史の整理、セクシャル・マイノリティをめぐる人権施策、反婚の思想と実践（6月に米国の連邦裁判所が米国全州で同性婚は認められるとの判決を出し、祝賀ムードが広がったが、果たして手放しで「祝賀」できることなのかどうかを考えさせられる時宜に合った論考である）、コミュニティ論とその実践など、本書で考察の対象となる内容は多岐に渡るが、常に堀江は「『当たり前』は先入見にか過ぎない、と「多数者」というフィクションの中に安住してしまっている私たちに厳しく問いかける。

当たり前という暴力の暴露と複数の異なった経験（アイデンティティーズ）を紡ぎだしていく、その二つの「作業を丹念につづけていく」（343頁）ことで、応答可能性と抵抗可能性の両方を模索することが問いかけられている（だ）

夏の行事の報告① 「夏休みさんまクラブ」

今年度も「夏休みさんまクラブ」を7月23日（木）から8月30日までの平日21日間、開催いたしました。参加申し込み総33人と定員を超える申し込みがあり、大変盛況でした。

朝の1時間は宿題の時間とし、集中して宿題に取り組みました。昨年は宿題の後毎日実験や工作などのプログラムをしていたのですが、ゆったりした時間をもてなかったことを反省し、今年は週毎にテーマを設け、テーマに沿ったイベントを1回ずつ行いました。イベント以外の日は、自由に遊ぶ時間としました。新しいさんまハウスのいろんな部屋を使って毎日楽しく過ごしていました。午後には希望者のみで近くのプールにも毎日行きました。

子どもたちは朝8時半から夕方4時半までの一日の大半をさんまハウスで過ごします。夏休みさんまクラブでははじめに、「居場所作り」には大人たちのサポートだけでなく「みんなの協力が必要」と伝えました。子どもたちは上級生を中心に遊んだ後の片付けや積掃除を極的に取り組み、居場所作りに協力してくれました。またけんかなど友だちとの関係においても居心地のいい居場所であるように自分たちで考えて行動するように努めていました。参加してくれたみなさんのおかげでいい居場所ができたと思います。夏休みさんまクラブへのご参加ありがとうございました。

また、今年はボランティアとして水口幼稚園の職員を中心に10名の方にご協力を頂きました。心より感謝いたします（だ）

《夏休みさんまクラブギャラリー①》



宿題中。



カプラでロボットができたよ。「撮って〜。」



すぐそばの公園へザリガニ釣りにも行きました。



1時間もかかったドミノ・・・ちゃんと倒れるかな



《夏休みさんまクラブギャラリー②》

7月31日（金）永源寺に遠足
に行ってきました。



川の水は冷たかったね！



カレー作り



集中してるね（ビー玉コース）

「白いところが切りにくい。」



設立1周年記念講演会報告

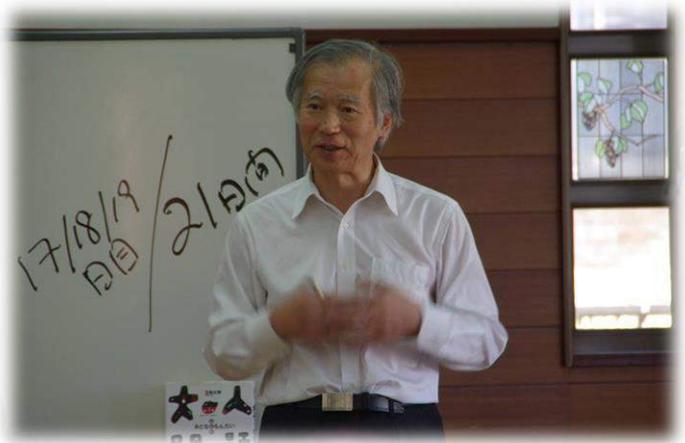
去る6月6日（土）、2015年度定期総会后、元立教大学教授の池住義憲^{いけすみよしのり}さんを講師にお招きし、当法人の設立1周年記念講演会を開催いたしました（於：水口幼稚園ホール。公益社団法人「あすぱる甲賀」の保護者研修と共催）。80名を超える参加者が集まり、大盛況の記念講演会でした。テーマは「大人が問題！？ 大人は問題！？ 大人の問題！？ ～子ども、子育て、教育を考える」です。

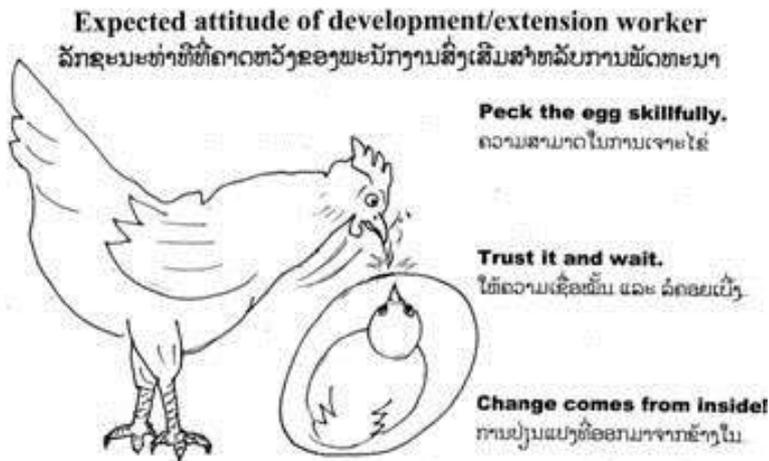
池住さんは、ブラジルの教育学者パウロ・フレイレの影響を受け、長年NGOや大学等の現場で日本のみならず、アジア各地で「開発教育」や「参加型教育」の普及に取り組んでこられました。今でこそ、一般企業などでも、シンポジウムやワークショップ等の進行役を指す「ファシリテーター」という言葉が普通に用いられるようになりましたが、実は池住さんこそ日本におけるファシリテーターの先駆者なのです。やや私事になりますが、池住さんは昨年2014年度立教大学で私、大川の副指導教授であった方です。私は池住さんの「最後の教え子」の一人として、1年間「ファシリテーター」の授業（というよりはワークショップ）に参加しました。常に、“誰と共に、どこに立つのか”というファシリテーターの「姿勢」を大切にされる池住さんにえらく感銘を受け、昨年一度さんまクラブでお呼びしたいとずっと思っていました。私にとっては念願のこなった講演会でした。参加者に実施された講演会のアンケートを見ると、参加者のひとりひとりに大きな意味と意義のあった講演会だったと思います。

さて、池住さんは、およそ90分に及ぶ講演時間を、常に「みなさんはどう思いますか？周りの人と話し合ってください」と会場にやさしく問いかけながら、講演というよりはむしろワークショップ形式で進めてくださり、とても分かりやすく、かつ面白くまとめて下さいました。内容のすべてをご紹介するにはとても紙面が足りませんが、今回の記念講演会のキーワードは「内側からの変化が可能だと信じて待つこと」。この一言につきると思います。

池住さんの「鶏の卵」の話をご紹介します。

鶏の卵は、親鳥が温め始めて21日目で孵化します。親鳥は、18日目or19日目で、温めるのをやめて、卵の殻を外からつつきます（これをタッピングと言うそうです）。親がつつくと、卵の中のヒナもつつき返す。このように親とヒナはコミュニケーションをとっています。そうしているうちに、雛が内側から殻を破って、ふ化するわけです。ここで池住さんは参加者に質問します。「親鳥はこの後、卵に対して

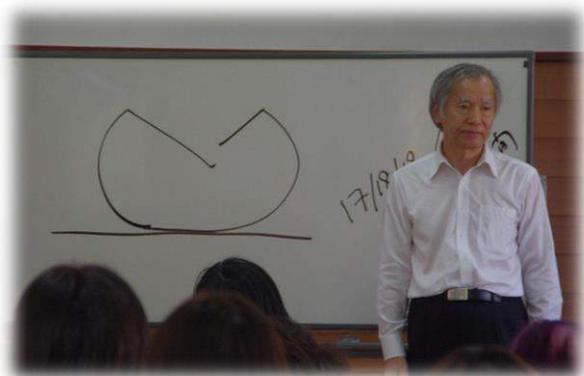




あるとても重要な行動をとります。それは何でしょう？。会場からはもう一度温めるのではないか、とか、コケッコーと鳴くのではないか(!?)、とかいろいろな意見がでました。しかし池住さんはとても意外な「答え」を会場に教えてくださいました。「卵が孵化する直前に親が卵に対してするある重要な行動。それは“何もしないこと”(Do nothing)です。待つことです。信じて待つことです」と。

何故、親鳥は卵が孵化する直前、何もせずに孵化を待つのでしょうか。親鳥が外から強くつつきすぎると、くちばしでヒナを傷つけて、殺してしまうかもしれない。また、ヒナを傷つけなくても内側に向かって殻が割れてしまうので、ヒナは卵から出てこれなくなってしまう。だから待つしかない。

池住さんは、この鶏の卵に対して親がとる行動が、実は親の子育て、教育者の子どもとの関わりにおいても非常に重要だと言います。鶏はまず、卵を抱いて温めます。私たちもまずは、抱きしめるように子どもの全存在を受け入れることが大切です。そして次に「つつく」こと。これには「タイミング」と「強さ」が大切です。時期ではないのにいくらつついても何の変化もありません。また、卵がまだ未熟な時に強くつつきすぎると殻が割れ、中のヒナが死んでしまいます。「タイミング」と「強さ」を大切にしながら子どもを「つつく」(背中を押す)こと。これが大切です。そして、後は「信じて待つ」。何を信じて待つのでしょうか。それは「変化は常に内側から」(Change comes from inside)ということなのです。大人は子どもに外から刺激を与えることができます。アドバイスをしたり、背中を押してあげたりすることができます。でも、その「つつき」が適切なタイミングでないと子どもは変化しないし、強すぎる刺激だと逆に子どもを傷つけてしまいます。子どもには自分で殻(困難な状況や様々な壁)を突き破って外に出てくる力がある。そのことを大人は信じて待つことが大切なのです。



池住さんは、子どもの問題だと世間で言われていることは、実は、子どもの力、可能性を信頼していない大人の側の問題なのだ、と言います。でも池住さんは会場に集った多くのお父さん、お母さん、教育者に言われました。「みなさん、自分の子育て、教育を責めないで下さい。私の言ったことは“答え”ではなく“ヒント”です。子どもを信頼するのと同じくらい自分自身を信頼して下さい」と。

講演後、「とっても元気がわいてきました」と言って帰られた保護者の方の笑顔が印象的でした。池住さん、どうもありがとうございました！（だ）

ハードロックという音楽ジャンルの片隅で

堀江有里

（公益財団法人世界人権問題研究センター・専任研究員。専攻は社会学、フェミニズム、クィア神学）

■「戦後70年」という時間と空間のなかで

日本の敗戦後70年。ちょうど8月には台湾、韓国と、日本の植民地主義の時代を想起せざるをえない状況のただなかに身を置きつつ、数日間を過ごしました。韓国でも企業の広告にすら掲げられている「光復（解放）70年」という文字。しかし、滞在中には、韓米両軍の合同演習の時機が重なり、北緯38度線に近い町では、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）軍の発砲により、緊張感の走る時間も過ごすこととなりました。

英語ではひとくぎりの表現として“decade”と表現しますが、「10年」という区切りがいかなるものかは問われることでもあります。それが71年になっても、72年になっても、大きく状況が変化するわけでもなく、68年でも69年でも歴史を踏まえた〈いま-ここ〉を記憶し続ける必要はありますし、そこに区切りなどないからです。とりわけ、戦争へと向かう法案が強行採決され、民主主義が棄却されていく日常を迎える、この日本社会のなかで。そして過去への反省も謝罪も「忘却」へと向かう方向性を国が推進していく、この日本社会のなかで。さらに外国人に対する排外主義がエスカレートしていく、この日本社会のなかで。

なぜ、このような社会を、わたしたちはつくってしまったのか。そして、それはどのようにして「修正」していくことができるのか。考えなければならないことも、聴かなければならないことも、動かなければならないことも、たくさんあります。わたしが生活する京都でも、戦争へと向かうこの国の状況を止めるため、多くの若者たちが街頭に立ち、そして叫び続けています。そこにもまた、あらたなつながりが生まれ、人びとの居場所がつくられていることがわかります。「政治」や「歴史」が、いかに〈いま-ここ〉と関連しているのかを、わたしたちは、それほどにわかりやすく実感できる時代に生きているのかもしれない。「政治」や「歴史」にかかわる“大きな物語”と呼ばれるものと、日常の身のまわりの出来事としての“小さな物語”が関連しているという〈発見〉が、人びとを街頭に向かわせている、とも言えるのかもしれない。とはいえ、ほかの多くの人びとにとって、その関連はみいだされることなく、分断線が引かれていることも事実です。「個人的なことは政治的なことである」——1960年代後半から広がっていったアメリカ合衆国における第2波フェミニズム（女性解放運動）のなかで使われてきたスローガン。この言葉は、日常の出来事が、いかに“大きな物語”と関連しているのかを認識するためにも使われてきました。このスローガンに寄り添いつつ、今回も「選び取られたコミュニティ」の事例をみていきたいと思います。

■「30周年」を迎えるハードロック・バンド —SHOW-YA

2015年8月31日——この日、あるロックバンドがメジャー・デビュー30周年を迎えます。その名は「SHOW-YA」（ショーヤ）。女性たちだけで構成されるハードロックバンドです。30周年を迎える直前、8月29日（土）、30日（日）両日、東京にある目黒鹿鳴館にて特別ライブを挙げる。かのじょらがいまのメンバー構成で立った最初のステージという意味での「原点回帰」でした。

1970年代後半からアマチュアのロックバンドのコンテストがヤマハ主催で開催され、多くのバンドが輩出されました。そのなかでも、ハードロックという音楽ジャンルで、女性だけで構成されるバンドは数少なく、SHOW-YAは、その後、草分け的存在として活動し続けることにもなりました。1987年9月には、出演者を女性だけに限定したロック・フェスティバル「NAONのYAON」を日比谷野外音楽堂にて開始。後輩の女性ロッカーたちを育てる役割をも果たしてきました。1980年代に結成され、紆余曲折あったものの、デビュー当時のオリジナル・メンバーに戻ったのが2005年。2013年に5人のメンバーは全員50代に突入しつつ、それから10年間、ふたたび走り続けているバンドです。

このSHOW-YAは、集まってくるファンの人びとをみていると、いくつかの要素で「居場所」をつくっていることに気づかされます。とくに、女性たちへのエンパワメント——力を与える行為——として、かのじょたちの音楽とライフスタイルという側面からみていきたいと思います。

■女性としてハードロックを生きること

ハードロックは、ロックのジャンルです。基本的には、ギター、ベースギター、ドラムス、キーボード、ヴォーカルというバンド様式にのっとり、アンプを通して大音響で演奏される重量感のある楽曲をいいます。エレクトリック・ギターの音をエフェクター（音響付加装置）を使って歪ませて演奏することや、ドラムスに2台のバスドラムが使用される（ツーバス）ことが多いなど、重低音を響かせ、より大きな音量で「攻撃的」な様相をもつものでもあります。このような楽曲のスタイルから、ハードロックの世界は、過度に“男らしさ”との親和性が高く、女性嫌悪さえも含んできたことがこれまでも指摘されてきました。そこでは男性の性の積極的／攻撃的な表現がなされてきたからです。そして、ここでいう男性の性とは、異性愛のそれでもあります。多くの場合、女性は性的対象としてしかとらえられておらず、主体はつねに男性にあるわけです。そのために、女性たちが参入することも難しい世界であることも指摘されてきました。

女性たちが主体となる時、ハードロックの多くの場合のように、男性を主体とし、女性を性的対象とする楽曲は成立しません。また、逆転して、女性を主体とし、男性を性的対象とする楽曲を提供したとしても、このパターンは、社会では“当たり前”の価値観の上に乗ったものではないので、マジョリティには違和感が残ります。

SHOW-YAの場合、特徴的なのは、歌詞の内容が異性愛中心の構成——“男と女の物語”——ではなく、「戦う／闘う」ことや、その対象や場としての「Life」（命／人生）などが多用されている点で

す。抽象的な「戦い／闘い」は、聴衆にとって、いかようにも読み取ることができるため、各自が勝手に消費することも可能になります。それでも、異性愛を“当たり前”とする社会のなかで、そこから解放される空間があることは、男女の対関係を中心とする家族を形成しない人びと——性的少数者やシングル生活者など——にとって、エンパワメントをもたらしていることが、ファンたちのあいだでもしばしば共有されています（詳細は、堀江有里、2013、「女がロックを生きるとき ——ハードロックバンド SHOW-YA のフェミニスト的読解」花園大学人権教育研究センター『人権教育研究』第21号）。

また、この楽曲を支えているのは、かのじょらのライフスタイルです。5人のメンバー中、結婚生活をしているのは1人のみ。ほかの4人は、シングル女性として音楽活動をしつつ、生活していることを積極的に発言してきています。もちろん、“結果としてのシングル”と、“選択肢としてのシングル”では意識も異なるかもしれません。しかし、男女の賃金格差から生まれる経済的格差や、シングル女性に対する社会的差別を考えると、女性が一人で生きていくには、まだまだ困難が横たわっています。そのようななか、かのじょたちのライフスタイルは、女性たちにとって、ひとつのモデルケースを提示しているとも言えます。実際に、わたし自身、ライブにしばしば足を運んでいるうちに、離婚経験者を含むシングル女性たち、レズビアンやバイセクシュアル女性たち、女性の身体をもって生まれながら自分の性自認を模索している人たちに出会っていくこととなりました。

■ロックという「居場所」

ポピュラーカルチャーを研究している社会学者の毛利嘉孝は、こう述べています。「ロックが政治的な意味を持つかどうかは、リスナーによるメッセージの解読＝読み替えの瞬間に賭けられている」（毛利嘉孝、1999、「ロックと政治のための覚書」陣野俊史編『21世紀のロック』青弓社、33頁）。SHOW-YAの「メッセージの解読」について、今回は少しご紹介しましたが、これも聴衆のひとりからの読みに過ぎないのかもしれません。

ハイカルチャーであるクラシック音楽への対抗手段として生み出されたロック音楽は、当初、そのメッセージ性やスタイルに「反体制」の要素が色濃く打ち出されてきたし、また、読み込まれてもきました。しかし、出現した途端に「ロックは死んだ」という表現もされてきました。電気を使い、大掛かりな装置を必要とするハードロックは、当然、そのパフォーマンスを遂行しようとするれば資金も必要です。そのため、簡単に商業主義ともむすびつくわけです。とりわけ、1990年代後半以降、CDなどの売上が激減した時代に、ミュージシャンたちが音楽活動を続けていこうとすれば、より多くの聴衆を獲得し、利潤を上げていく必要があるわけで、SHOW-YAもそのような“呪縛”から自由ではありません。

それでもなお、SHOW-YAという女性だけで構成されるバンドが走り続けるところでつくられるコミュニティ——それは何よりも、わたしにとっての「居場所」なのかもしれません。30周年ライブ初日の熱い余韻を携えながら、そう考えています。

夏の行事の報告② 「ヒロシマ・イワクニ平和スタディツアー」

8月3日（月）～7日（金）の4泊5日、車1台で広島・岩国に行ってきました。参加者は中学生2名、小学生2名の4名でした。初日は、広島平和記念公園に行き、資料館を見てまわりました。半分に途中で見られなかったのが残念でしたが、今回は実際に被曝をされたからの証言を聞きました。体験された方しか分からないその時の状況を聞き、戦争の悲惨さを痛感する時となりました。その夜は、広島キリスト教社会館に泊めていただき、広島風お好み焼きを堪能しました。翌日は岩国に移動し、米軍基地を大川が案内しました。基地の外で説明していると、銃を持った警護の日本人が近づいてきて少しの恐怖を覚えました。その後は、錦川の支流で行っている日本基督教団周防教会のキャンプに合流しました。川でのキャンプは、特にプログラムがあるわけではなく、とてもゆったりとした時が流れていました。このキャンプは戦争、そして平和についてスタッフが言葉で伝えるのではなく、見たり、聞いたり、体験したり、出会うことで自分自身が感じとるスタディツアーです。今回もいろんな出会いがありました。その感じたことを自分で言葉にする振り返りの時も大事にしました。戦争が現実のものにならないように、自分はどうしていくべきか、考える時となったと思います。ご参加、そしてご協力いただいた皆様、ありがとうございました（じ）



被曝体験を聞く



平和記念公園で焼け野原になる前の地図を見る



岩国米軍基地の前



錦川での川遊び



大ジャンプ！！



最終日の記念撮影

2015 年度会費納入者・寄付者氏名（敬称略、順不同） 8/31 現在

◆**正会員受取会費**： 宇田慧吾、鶴飼典子、福永智子、森美佐子、福澤祥、谷涵、上村万里子、藤原忠昭、寒川公子、神山登美子、関谷直人、入治彦、石橋秀雄、浅野献一、柳井一郎、矢島哲夫、西村二郎、榎田翔希、藤居都坂元明子、星山京子、平野明子、高畑明久、片岡公子、越後屋朗、坂井虔、大塚慎、森口茂、村田敏、大川大地、大谷和雄、中島孝之、吉村里佳、片岡広明

◆**賛助会員受取会費**： 北尾貞弘、三谷一子、三谷一夫、三宅静江、上田俊子、鳥井新平、榎本栄次、北川博司、谷文子、横田法子、中井正子、川島洋一、北垣景子、大谷元宏、藤岡正人、木下栄美子、森田ヤス子、

◆**受取寄付金**： 宇田慧吾、鶴飼典子、谷村徳幸、池田純平、大川大地、谷村耕太、福澤祥、上村万里子、関谷直人、谷文子、片岡広明、川島洋一、北垣景子、大谷和雄、岡八十二、三谷一夫、寺村孜、川上純平、佐藤幹雄、広瀬規代志、日本基督教団岩見沢教会、寒川公子、平野明子、久保恭子、片岡正義、安田和人、坂元明子、伊早坂貴宏、三吉明、島しづ子、横田明典

みなさまのご支援、ご協力に心より感謝いたします！

編集後記

△ニュースレター「さんま」の第5号（2015年秋号）をお届けいたします。事務局の怠慢で夏号をお届けできずに申し訳ありませんでした。△当法人監事の川上幹太さんの4コマ漫画、当法人理事の堀江有里さんによる連載『「居場所」を考える』も掲載いたしました。お二人とも、お忙しい中ご協力下さり、ありがとうございました。△今号は、夏の行事の報告も含めて、「さんまハウス」大特集でお送りいたします。繰り返になりますが、大変厳しい財政状況の中、みなさまのご支援とご理解を頂き、拠点取得という大きな決心をいたしました。引き続き、みなさまのお力が必要です。ぜひNPOさんまクラブをお支え頂き、支援の輪を広げて下さいますようお願い申し上げます。△「さんまハウス夢づくり債」にご協力頂いたみなさま、ありがとうございました。ご芳名は省略させていただきますが、ご容赦下さい。△良いシルバーウィークをお過ごし下さい。次号はクリスマス前にお届けいたします。（だ）

ぼくらサンマーズ かわかみが たのむ



NPOさんまクラブ

理事長：谷村徳幸

スタッフ：大川大地（事務局長）、谷村耕太

〒528-0028 滋賀県甲賀市水口町梅が丘5-2

Tel: 0748-76-3414 FAX: 0748-76-3413

E-mail: 3ma.club@gmail.com

ホームページができました！！ <http://3ma-club.com/>

銀行口座

湖東信用金庫水口支店 （普）0249376

「特定非営利活動法人さんまクラブ 理事長 谷村徳幸」

郵便振替口座

00910-7-202663

「特定非営利活動法人さんまクラブ」